「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁴⁶

「ベルリンの壁」崩壊後の15年目の現実 - 映画「グッバイ、レーニン！」

61年8月、冷戦の象徴として建設された高さ4^m、全長155^{km}に及ぶ「ベルリンの壁」は、28年目の89年（平成元）年11月9日夜、突如押し寄せた東ベルリン市民によって崩壊し、その後のドイツ統一、東欧の社会主義体制の崩壊へと途を拓いていた。そもそも「ベルリンの壁」の建設は、東独市民の西側への流出を防ぐためのものであり、それまで約300万人の東独市民が流出していたので、そのまま流出が続けば東独の崩壊は決定的であった。壁の崩壊の予兆は4ヶ月前からあった。

東独市民の流出は7月中旬から始まっており、ハンガリー、チェコスロバキア、東ベルリンの西独大使館ないしは代表部に西独への移住を求めて押しかけたために、西独政府が8月中旬、東ベルリンの代表部やブダペストの大使館を閉鎖する事態が起きた。しかし、ハンガリー政府は5月2日にオーストリア国境との鉄条網と監視塔を撤去していたので、東独市民は日に100人ぐらいの規模で、その後「緑の国境」といわれるようになったハンガリーとオーストリア国境を越境しはじめた。8月19日、ハンガリーの民主フォーラムと汎^{はん}ヨーロッパ運動の共催で、国境のない一つのヨーロッパのスローガンを掲げた「汎^{はん}ヨーロッパ・ピクニック」が、ハンガリー・オーストリア国境のショブロンで開催された時、参加者が一万人以上に膨れ上がったために、政府の許可を得て国境の門が象徴的に開かれたその間隙を縫って、参加していた東独市民約900人が大量脱出したことが、「ベルリンの壁」崩壊の引き金になった。

以後、東独市民の越境は200 - 500人の規模で毎日続き、ブダペストとブラハの西独大使館に押しかけた東独市民の籠城者は、9月には最高潮に達した。東独政府は、東ベルリンの西独代表部に籠城中の市民に処罰しないなどの説得を行って流出の防止に努めたが、東独市民はハンガリー、チェコ、ポーランドに脱出し、収容センターや西独大使館に籠城して旅行許可を待った。ハンガリー政府は9月10日、東独との査証協定を一次停止し、同国にとどまっている約5万の東独市民に国境を開放した。同日夜半、東独市民の7千人以上が列車や車で西独に脱出し、13日までにハンガリーから流出した東独市民は約1万5千人に上り、10月下旬までに約5万の東独市民がこのルートで流出した。「緑の国境」は東西ドイツの壁に風穴を開けたのである。

東独市民はまた、ブラハやワルシャワにも脱出路を求め、ブラハの西独大使館には約3500人が籠城するなどして出国許可を待った。ニューヨークの国連総会でフィシャー東独外相と会談したゲンシャー西独外相が9月30日午後5時半、突如ブラハの西独大使館に現れ、バルコニーから「皆さんに出国できることをお知らせするためにここに

来ました」と告げると、籠城中の東独市民から「自由だ」、「万歳」などの歓喜の声が沸き上がり、この措置によってチェコ、ポーランドから約6千名が出国した。同地の西独大使館への駆け込みは止まず、10月4日には再び約1万2千人の出国許可が出されたために、東独政府は同日チェコへの査証なしでの旅行を禁止した。しかし、訪ソ中のグレンツ書記長にゴルバチョフが改革促進を促したり、古参政治局員5名が更迭される動きがあり、11月1日にはビザなしでチェコに旅行する自由が得られ、約4千人の東独市民がプラハの西独大使館に押し寄せた。

11月4日には東ベルリンで民主主義と自由選挙を求める百万人デモが起こり、同日チェコ政府が東独市民の出国の自由を保障すると、数日のうちにチェコ・ルートで5万人以上の東独市民が大量脱出した。この時点で東独市民の流出を防ぐ「ベルリンの壁」の効力はなくなり、11月9日の壁の崩壊まで約22万5千人が流出した。壁を越えて逃亡を試み、射殺された者が79人にのぼった「ベルリンの壁」は11月9日、完全に息を断たれたが、この日の様子を当時西独大使であった木村敬三は、『文藝春秋』の特集「平成30大事件の目撃者」(04.4)の中で、次のように述べている。

《あの日の夕方、東ベルリン市民が大挙して国境検問所に押し寄せているというニュースが流れました。ある東独共産党幹部が西側のテレビ取材に対して、「今後はいつでも西側に行ける」と話したことがきっかけだという。テレビの画面には、ものすごい数の人たちが「壁」に押し寄せ、次々と西ベルリンへと渡っている様子が映し出されている。これは大変なことが起きた、と私も各方面に連絡を取り始めました。

その日、西独のコール首相はポーランドにいたのですが、すぐに訪問を切り上げ、ボンに引き返し国会に急ぎました。続々と議員が集まってきた国会では、誰かが突如ドイツ国歌を歌い出し、つられて全員が声を揃えて歌いだした。非常に感激的なシーンでした。

その間にも、東ベルリン市民はどんどん西ベルリンへ移っていく。ボンにいた日本の記者たちはすぐベルリンに駆けつけましたが、私は西独政府関係者、東独大使館やベルリンの総領事館など各方面との連絡もあり、また立場上ボンから動くわけにはいきません。とにかくテレビを見続け、電話で頻繁に各地と連絡をとり、一晩中、外務省へ打電することでその夜は明けていきました。》

ハンガリー政府が5月2日にオーストリアとの国境にある鉄条網と監視塔を撤去して、東独国民の西独への脱出の手助けを取り計らったのは、《ハンガリーに多大な借款を供与する等》の西独の工作によるものだったという裏事情と共に、次のような手違いによる事態についても触れられている。《9日を過ぎてわかったのは、最初のテレビ報道で半ば誤解に近い面があったということでした。記者会見をしたのは、シャボフスキという共産党の政治局員でしたが、彼は翌10日からビザを発行することで西側への移動を許可する、と言う予定だったのです。ところが彼は「いつか」と記者に聞かれ、曖昧に「すぐだ」と答えてしまった。その言葉を聞いた東ベルリン市民はまさに「今」と捉え、ビザなしで国境に駆けつけてしまったわけです。押し寄せる市民に対してどう対処する

のか。検問所の警官が上層部に問い合わせると、政府は指令を理解しておらず、通過許可をせざるをえなかった。そうした運も重なっていたのです。》

流出した東独市民の調査では、動機として「表現の自由・旅行の自由の欠如」(74%)、「自分の希望どおりの生活をしたい」(72%)、「将来の見通しの暗さ」(69%)、「国家の干渉と束縛が嫌い」(65%)、「生活状態が悪い」(56%)が挙がっており、「自由」というキーワードに集約される。流出者は18 - 30歳の若年層が多く、学歴の高い市民が多かった。映画『グッバイ、レーニン!』は、「ベルリンの壁」が崩壊した89年11月9日当時を舞台としている。

東ベルリンのテレビ修理店に勤める青年アレックスの父は、10年前に家族を捨てて西独へ亡命した。その反動で西独を嫌悪するようになった母クリスティアーネは、地域婦人部などで東独に忠誠を尽くす活動に熱を入れ、愛国主義者の道を突き進んでいた。世の中の変化を感じ取っていたアレックスは、89年10月7日の東ドイツ建国40周年記念日に東ベルリンで起こった、改革を求める大規模なデモに参加する。警官ともみ合って逮捕される彼の姿を偶然目撃した母は、ショックで心臓発作を起こし昏睡状態に陥る。寝たきりの母に責任を感じたアレックスは、意識のない母に毎日のように語りかけ、必死に看病を続ける。

その一ヶ月後の11月9日に「ベルリンの壁」は崩壊し、たちまち東ベルリンは資本主義の波に覆い尽くされた。早速、バツイチで子持ちのアレックスの姉はバーガーキングに勤め出し、アレックスもテレビ修理店が閉鎖されたために、衛星アンテナのセールスマンに転職する。西側からやってきた映画オタクのデニスと組んで、サッカーのワールドカップをダシに売りまくったりするが、他方私生活では、母の看病を通じて仲良くなったロシア人看護婦のララと恋人同士になる。8ヶ月後の90年6月、母のクリスティアーネは奇跡的に目を覚ますが、彼女の昏睡状態の間に「ベルリンの壁」は崩壊し、東ドイツは事実上消滅していた。医者から「もう一度、強いショックを与えたら命取りになる」と聞かされたアレックスは、ドイツ消滅の事実から母を隔離するために、病院から自宅に連れ帰って、彼女が倒れた当時の状態を維持しようと奮闘する。

寝たきりの母を相手にアレックスは姉や恋人、母の友人らの協力を得て、共産主義体制が続いている芝居に精を出す。あまりにも急激な社会の変化に予想以上の困難が伴う。スーパーに取って代わられることが決まった食料品店の棚は、それまでの品不足から一転して西側の商品で埋め尽くされ、毎日飲んでいた東ドイツのコーヒーも、母が愛した東独製のピクルスももはや手に入らない。昔の商品を探すためにアレックスはスーパーのゴミ箱まであさるが、ゴミ箱から拾い集めた古い瓶に中身を詰め替えることによって、このピンチを乗り切る。窓から見えるコーラの看板を隠したり、レーニン像が撤去されているのを気づかせないようにしたり、色々と気を配ってその場を取り繕っていく。だが、「テレビが見たい」という母の願いにアレックスは最大のピンチに立たされる。

明日のキューブリックを目指すデニスの協力、偽のニュースビデオを作って放映し

たり、崩壊後のニュースにはビデオで編集した“官営ニュース番組”を流して、「コカ・コーラは実は東独の発明品」だとか、「西側の競争社会に疲れた人たちが続々と国境を越えて、難民として東にやってきました」と、アレックスがナレーションをかぶせて母をごまかす。ところがある日、少し体調のよくなった母は、息子が留守の時に一人で町へ出てみる。そこで驚くべき光景を目にする。町は激変しており、中古車屋に西側の車が並び、街にはコカ・コーラなどの企業が立ち並ぶ光景に、彼女は啞然とする。若者たちの服装が華やかになっているのをいぶかる彼女の前に、追い打ちをかけるような光景が現れる。ヘリコプターが飛んで来て、レーニンの銅像を運んでいるのだ。彼女の眼には消え行くレーニン像が、彼女に救いを求めているように映る。

母が居なくなったことに気づいたアレックスは、大慌てで町の中を探し回り、呆然としている母を見つけ出し、競争社会で行き詰まった西ドイツを東ドイツが吸収して救ったという嘘を必死につき、彼女を安心させようとする。母は満足の笑みを浮かべて、「うちでも難民を受け入れてあげたら」という。しかし、ごまかしにも限界が見え始め、アレックスは姉や恋人から真実を打ち明けるように諭される。そんな時、一家は郊外にある森の小屋に出かける。そこでアレックスは、母に本当のことを打ち明けるつもりだった。しかし、彼より先に彼女の口から、10年前の父の亡命についての事実が切り出される。それは西側に亡命したアレックスの父は、家族を捨てたわけではなく、政治的な意思で亡命を決行し、後から西側に家族を呼び寄せるつもりだったが、危険で果たすことができなかった、というものであった。

父についての衝撃的な事実を知ったアレックスは、父の居所を調べて会いに行く。予想もしなかったことに、父は新しく結婚して子供までもうけている。アレックスは改めて衝撃を受けるが、父のほうも息子の突然の訪問に戸惑い、言葉を失う。父が家族を忘れたわけではなく、何度も何度も母と連絡を取っていたことがわかって、アレックスは父の苦渋を知り、父の痛みや負い目に触れる。彼は父に母の病状を告げるが、別の家族をもっている父を母に会わせることを一瞬ためらう。母はそのショックに耐えられるだろうか。だが、父が母に会う意思をもっていることがわかって、彼は病院で父を母に会わせる。母は父との再会を喜び、もうこれで思い残すことはなくなったというようにして、東ドイツが理想の国家になったことを信じながら、息を引き取る。

03年2月、「ベルリンの壁」崩壊から15年を経過して作られたこの映画は、ベルリン映画祭で最優秀ヨーロッパ映画賞（嘆きの天使賞）を受賞し、ドイツでは連邦議会でも上映され、650万人の国民が観るメガ・ヒット作になり、その年のドイツ・アカデミー賞の9部門を独占した。04.3.28付産経は、この映画をかつての東西で過ごした人たちがどう観たか、についてその声を取り上げている。

《大阪ドイツ文化センターで研修中のイボンヌ・ヒューブナーさん（26）は東独出身で中学生の時に統一を経験している。「映画で描かれたように数年間は物質的に豊かになったことを実感でき、うれしかった。あこがれのヘッドホンステレオやカラフルな洋

服が買えるようになったから」と当時を振り返る。が、数年後には「東側の企業が相次いで倒産し、家族や親戚の6割が失業してしまった。かつて安心して全員が通えた幼稚園制度も今はない」と苦渋の表情を浮かべた。「本作では旧東側の人を持つこんな複雑な思いを初めて描いている。かつてドイツではこんな意見は出せなかった。テレビなどでも数年前からようやく言えるようになったんです」と打ち明ける。

ミュンヘン大生で大阪市のドイツ総領事館研修生、ペーター・イスガールさん(23)は旧西独出身。「これまで知らなかった東側の異質な面が理解できた。ドイツでも日本と同じでハリウッド作品など海外映画の方が人気が高い。本国作品がこれだけ多くの人に見られたというのは珍しい。それだけドイツ人にショックと大きな影響を与えた作品なんです」と説明する。》

この映画を東独出身者が自分の体験に引き寄せて、「複雑な思い」で観ているのに対して、当然のことながら西独出身者は「これまで知らなかった東側の異質な面が理解できた」というように、「東側の異質な面」に西側が影響されたことはこれまでなかったという優位性を、無意識のうちに覗かせている。つまり、東側にとって西側は壁を乗り越えてでも脱出しようとする、魅力的であこがれの世界であったけれども、西側にとって東側はこの映画でその「異質な面」を知ったという程度の世界にすぎなかったことが、彼らの短いコメントのなかから浮かび上がってくる。

それは、54年生まれのヴォルフガング・ベッカー監督が川本三郎との対談(『世界』04・2)で、壁崩壊の当時、「東ドイツに対して、どういうイメージを持ってい」たかと聞かれて、「ベルリンの自由大学というところで学んだんですが、実のところ、当時は東ドイツのことをそんなに考えたことはなかった」と答え、「ベルリンの壁があるにもかかわらず」と更に聞かれて、「ええ。私だけではありません。西ベルリンに住んでいる人間は、東ベルリンに、東ドイツにそんなに関心がなかったんです。／東の人は、西に関心を持っていたかもしれませんが、われわれはそうではなかった。無関心だった」と語っていることと、ちょうど見合っている。不思議がる川本氏に監督はこう説明する。「というのは、若い人間には、まずひとりひとり、生きてゆくための切実な現実があったからです。／仕事のこと、恋愛のこと、将来のこと。自分のことで精一杯だった。ベルリンの壁は毎日のように見ていましたが、意識のなかにはなかったとっていい。／失業の問題もありましたし、狭い町に大勢の人間が住んでいましたから住宅難でした。毎日、みんな自分の問題を抱えていて、大きな問題を考える余裕はありませんでした。」だからといって、「西ベルリンでの生活は、つらかったということ」(川本氏)ではなく、「当時の西ベルリンは、実に刺激的で活気がある町でした。西ベルリンに住むのは、素晴らしいことだった。」要するに、毎日の生活のなかに壁について考えなくてはならなくなるモチベーションは存在していなかったということであり、だから壁の崩壊によって、「はじめて東ドイツの人たちのことが身近かに思えてきました。それでも当時、彼らがどんな思いでいたかまではわかりませんでした。想像出来なかった。／だから、こ

の映画を作るにあたって、何人もの人に取材したんです。」

この発言から、壁崩壊によって西側から東側にありとあらゆる豊富な商品が流出してきたのに対して、東側から西側へは裕福ではない人々が大量に流出してくる事態であったのが目に浮かぶ。監督はこの対談で自分や脚本を書いた者が東独出身者ではなく、西独出身者であることを強調した上でこう言う。

「この映画は、基本的にコメディですが、あの時代の東ドイツの人たちの状況を喜劇的に描くという発想は、東ドイツの人たちには生まれなかったでしょう。ノ西ドイツの人間として、一定の距離を持って、あの状況を見ることが出来たから、コメディとして作ることが出来たんだと思います。」そして、「ベルリンの壁の崩壊というシリアスな事実を、政治的レベルではなく、普通の人々の日常生活から描きたかった」から、壁崩壊がなによりもピクルスの消失として東独の人々を襲ったことを取り上げて言う。「あの母親は、西側のピクルスに比べればまずかったかもしれないが、それでも東側のピクルスが好きだった。それがあつというまに店頭から消えてしまった。」

ベッカー監督は『キネマ旬報』(04年3月上旬号)のインタビューでも、「私が描きたかったのは、あくまでも小さな家族の物語だ。確かに政治的な背景は使っているが、それはあくまでも背景で、そこに社会的なメッセージを込めたつもりはない」と語っており、母クリスティアーネ役のカトリーン・ザースもまた、映画パンフの中で、「これはベルリンの壁の崩壊を描いた映画じゃないわ。ベッカーにとって大事なことだったのは何といても母と息子、そして家族の絆を描くことだった。歴史的な背景の知識があってもなくても、観客が共感できるストーリーよ」と強調する。もちろん、「小さな家族の物語」にも時代の波は激しく押し寄せるから、自由化デモ、ベルリンの壁崩壊、ワールドカップ、通貨統合、東西ドイツ統一といった出来事が、否応なしに家族の関係を貫く。

映画の中で90年のサッカー・ワールドカップのイタリア大会で西ドイツ代表が優勝したエピソードが盛り込まれていれば、東西マルクの通貨統合によって40年間かけて母親がためた3万マルクのへそくりが、通貨の交換期限が過ぎて紙切れになってしまう場面も描写されている。壁崩壊によって東のピクルスがたちまち消失してしまったように、それまで存続していたピオニール(共産主義少年少女団)も消滅してしまったために、お小遣いを与えてピオニールの制服姿で病床の母を見舞ってもらう演技を少年たちに依頼するという滑稽さも用意されている。とりわけ、アレックスたち少年にとって輝けるヒーローであった東ドイツの宇宙飛行士が、中高年の労働者を襲った東の経済停滞によってタクシードライバーになっている場面を挿入することで、東ドイツの理想が地上に成り下がっていくメタファーも駆使されている。

監督の意図通りにこの映画が「ベルリンの壁の崩壊を描いた映画」ではなく、壁崩壊という激動の時代の中での「小さな家族の物語」であったとするなら、我々はあくまでもその「家族の物語」であるという点に比重を置きながら、映画を辿っていく必要があるにちがいない。もちろん、なぜ壁崩壊という歴史的な背景を設定とせざるをえなかつ

たのか、という問いを見つめながら。「家族の物語」は、自由化デモに参加している息子が警官に暴行されている現場を母親が目撃して、そのショックから倒れて昏睡状態に陥るところから始まるが、どうして母親は卒倒するほどの衝撃を受けたのか。

映画では母親は「東ドイツの社会主義」を信じているというよりも、その現実の中に「あるべき社会主義」の夢を信じている女性として設定されている。その「あるべき社会主義」とは、高度な消費社会を実現することによって激烈な競争社会を展開している西ドイツではけっして見出されない、「他人を押しつけてまで金もうけをしなくてもいい」ような、「ゆったりとした共生社会を目ざすもの」とみなされている。しかしながら、そのような理想を含んでいるかもしれない「東ドイツの社会主義」そのものが危機に陥りつつあることは、母親だって肌身で感じ取っている。だが自分の息子がデモに参加しているのを見たとき、その危機が遂に自分たちの家族にまで押し寄せているのを感じざるをえなかったし、更に息子が警官に暴行され逮捕されるのを見て、母親は自分の理想が家族の次元で打ち砕かれつつあるのをまさに目撃していたのだ。

したがって、彼女の卒倒は「東ドイツの社会主義」の卒倒であり、その現実の中に彼女が育もうとしていた夢の卒倒でもあった。彼女の夢が8ヶ月もの昏睡状態に陥っているあいだに、「ベルリンの壁」は崩壊し、「東ドイツの社会主義」は事実上消滅した。都合よく彼女は昏睡状態に陥って、現実の大転換の前に身を晒さずに済んだ、ということではない。彼女の卒倒、昏睡状態は彼女の夢の卒倒、昏睡状態以外のものではありえなかったから、もうその時点で彼女の夢にとって、現実のその後の出来事は予見されていたといえる。つまり、彼女にとって自分の夢が打ち砕かれてしまった以上、もはやその後の彼女の知らないどんな出来事も大事ではありえなかった。彼女が倒れることになった衝撃を、彼女の夢が倒れることになった衝撃と打ち重ねて把握するなら、どうしてもそう考えざるをえなくなる。もしそうでないなら、彼女が受けた衝撃は彼女から壁崩壊後の東ドイツの消滅といった社会的大変動を覆い隠すために、卒倒、昏睡状態を導入するつまらない小細工にしかすぎなくなる。

母親が8ヶ月の昏睡状態から覚醒したとき、彼女自身の夢からも覚醒したにちがいない。ただ単に昏睡しているだけではなかった。裏返せば、自分の夢から覚醒するためには8ヶ月の昏睡状態を必要としたのである。確かに彼女は自分が昏睡している間に起こった出来事を知らなかったが、自分の夢を打ち砕かれた彼女にとってはもはや何事でもなかった。ところが、デモへの自分の参加が熱心な愛国主義者の母親に衝撃を与え、生命の危機をもたらしていると負い目を抱く息子には、彼女の昏睡中に大きく変わった現実には彼女を直面させることなど、とても考えられなかった。もちろん、息子のデモへの参加にすら衝撃を受けて倒れる母親なら、壁崩壊や東ドイツの消滅を知ったときは息の根が止まるほどの衝撃を彼女に与えるだろうと思ったのだ。息子たちは、母親が自分の夢を打ち砕かれた母親として覚醒していることを知らなかったのである。そのズレから生じる悲喜劇が、この映画を「コメディ」にしていたのだ。

8ヶ月の昏睡状態から覚醒した母親は当然のことながら、以前と何か様子が違うのを感じる。息子が慌てふためいて母親の望み通りにしようとするほど、彼女の疑問は高まってくる筈だ。おそらく決定的であったのは、東側のピクルス瓶に詰めた西側のピクルスであった。彼女がその味の違いに気づかない筈がなかった。そのときに彼女はすべてを覚ったにちがいない。だが彼女は息子の芝居を責める気にはなれなかった。なぜなら、彼女のために息子が必死になって、大芝居を打っているのがわかっていたからだ。このときから彼女も息子の芝居を演じる役者の一人になった。母親を気遣って嘘をつきつづける息子を、母親も気遣って彼の嘘に合わせるようになったのだ。息子が一体なにを隠しつづけていたのかは、彼女が一人で町の中に出たときに目撃した風景の一変からすべてが了解された。だが、母親の身を案じる息子はそれでも芝居をつづけ、彼女は彼の芝居を受け入れた。

いうまでもなく母親が息子の芝居を受け入れたのは、それほどまでにして自分の身を案じてくれる彼の気持が伝わってきたからである。自分の夢を喪失した彼女の目の前にあるのは、息子の自分への愛情のみであった。死期が近づいているのを覚っている彼女にとって最大の気がかりは、息子の父親である自分の夫がなぜ西側に亡命したのか、その真実を伝えることだった。息子が母親に現実を隠しつづけていたように、母親もまた彼の父親のことを隠しつづけてきたのだ。壁の崩壊によって親子関係の分断状態もまた、解消されねばならないことを母親は願ったのである。西側で新たな家庭を営んでいる父親は息子の手引きで病床の母親と面会することになり、母親はあたかも東ドイツが理想の国家になったという嘘を信じて死んでゆくかのように描写されているけれども、もちろん、母親は息子の芝居に溢れ返っている自分への愛情を幸せに感じながら、死んでいったのである。

映画『グッバイ、レーニン！』は、自由を求めて西側に脱出した父親、東側にとどまって社会主義の夢を追い求めようとする母親、民主化デモに参加する息子たち若い世代、の三者を描きながら、「小さな家族の物語」のうちに、「グッバイ、レーニン！」とはなにか、という問いを静かに突き迫っているようにみえる。ここでもし息子が芝居などせずに、覚醒した母親に壁が崩壊した現実をありのままに見せていたなら、どうなっただろうとふと考えてみる。息子が案じたように、母親は大ショックを受けて再び卒倒したのだろうか。それはありえないと思う。彼女の卒倒は現実の社会主義の崩壊に起因していたのでなく、あくまでも社会主義の夢の崩壊に帰因していただろうからだ。ただその場合、息子は母親に嘘をつくことはなっただろうけれども、本当の現実は自分の夢から覚醒した彼女になにも与えるものはなっただにちがいない。そこには彼女の失った夢に代わりうるものは、なにも用意されていなかった。

社会主義の夢が突き崩されて自分を支えていたものを失ったとき、母親は息子が、すなわち家族が寄り添ってくれているのに改めて気づいたのである。息子の民主化デモへの参加が自分の夢を断つことになったけれども、その息子が遠い夢の代わりに身近に手

が触れる家族の思いやりを運んでくれたのであり、母親は「遠く大きな夢の物語」のなかで人は生き死にするのではなく、「小さな家族の物語」のなかで生き死にする存在であることを覚ったにちがいない。そのとき、西側に10年前亡命した息子の父親である自分の夫のことも強く差し迫ってきたと思われる。異なる体制によって家族が分断される悲劇に見舞われようとも、家族というものはけっして分断されえない絆を深く底流させている唯一自然な関係であることを、母親は感じ取っていたのだろう。彼女はすべてを知り、すべてを受け入れながら、自分の「小さな家族の物語」のなかで息を引き取っていく充実感を味わっていたのだ。

「グッバイ、レーニン！」とは、人々が抱く「遠く大きな夢の物語」の崩壊なのだろうか。本当に、「遠く大きな夢」よ、さようなら、なのだろうか。人々が「遠く大きな夢の物語」に惹かれるのは、「小さな家族の物語」の狭隘きょうあいや息苦しさ^{きくしさ}に起因しているのではないだろうか。太宰治は「家庭の幸福は諸悪の根源」と喝破したが、人は「家庭の幸福」を求めながら、同時に、「家庭の幸福」を破壊する存在でもある。つまり、「家庭の幸福」を求めて「遠く大きな夢の物語」へと手を伸ばして、「家庭の幸福」そのものを破壊するというパターンに人々はいつも足を掬すくわれているとして、「グッバイ、レーニン！」が「小さな家族の物語」のなかに人々が閉じ込められることを意味しているわけではないことも確かなのだ。映画もまた、母親は死に、父親は新しい家族のなかで生き、息子は恋人と共に東西ドイツ統一の激流を泳いでいく今後を示唆しながら、もはや東でも西でもない息子たち世代がつくりだす家族の新たな関係を予見していた。

「グッバイ、レーニン！」はあくまでも、レーニンよ、さようなら、であって、夢よ、さようなら、ではなかった。映画の中の母親の卒倒、昏睡状態、覚醒後の死が、東ドイツの命運そのものを象徴していたとするなら、西に亡命した父親の新たな家族の営みはもちろん、西ドイツの興隆そのものの象徴であった。つまり、母親と共に東ドイツは死に、父親と共に西ドイツは生き残った。そして東ドイツでは呼吸できなくなっていた息子は、再統一されていく新たなドイツを牽引する若い世代けんいんを象徴していた。ここで問題になってくるのは、「グッバイ、レーニン！」を決行したり、その奔流に巻き込まれた東ドイツの人々は、「グッバイ、レーニン！」に取って代わる夢を西ドイツに見出していたということである。あるいは映画の中の母親のように、「グッバイ、レーニン！」に取って代わる夢は西ドイツの中ではもはや見出されないことを覚っていたことである。前者は「こんな筈ではなかった」となり、後者は社会を生きる夢を喪失したままであった。

04.8.11付朝日は、ドイツで社会保障削減に反対する第2の「月曜デモ」に数万人が参加したと報道している。《失業保険削減などシュレーダー独政権が進める社会保障の切り詰めに反対する市民らが9日、旧東独の各都市を中心に合計数万人が参加するデモをした。毎週月曜日にあることから、89年9月に旧東独ライブチヒで始まりベルリンの壁崩壊につながった市民運動になぞらえ、独マスコミは第2の「月曜デモ」と呼ぶ。

デモは7月下旬の月曜の夕からマグデブルクなど旧東独の失業者の多い都市で始まった。

ドイツでは2年以上の長期失業者に対する失業保険の削減が来年初めに導入されるほか、年金削減など社会保障制度改革が進む。成人の20%が失業者という旧東独地域への影響は特に深刻だ。89年にライプチヒの月曜デモの先頭に立った教会指導者は「平和革命の第2幕はこれから」と述べた。

独政府報道官は「かつての月曜デモは独裁体制に対するもの。状況がまったく違う。必要な社会保障改革について冷静に議論してほしい」と沈静化を呼びかけている。」

ドイツ政府が行おうとしている社会保障改革は、失業保険金の給付期間の終了後も支払われていた失業救済金を廃止し、生活保護とほぼ同じレベルの「第2失業保険金」の導入によって、労働が可能な失業者を減少させる目的を掲げており、戦後のドイツが目指してきた社会保障国家体制を転換させる、大規模な改革である。ジャーナリストの福田直子のレポート（『世界週報』04・9・28）によれば、《これまでの制度では、失業してもかなり長期間にわたって退職時の手取り所得の3分の2を受け取ることができたが、今後は長期失業者に対して、甘えは許さない、外国人しかやりたがらないような低賃金の仕事でもとにかく働くように促すためのメッセージであり、手厚い失業者保護によって435万9千人の失業者や10・5%の失業率、170万人もの5年以上の長期失業者（以上、04年7月時点）が生み出されているという見方に基づいて、05年1月から《失業者は労働局から職業訓練や仕事を斡旋された際に、むやみに拒否するとさらに失業保険金を削られる》仕組みになっている。

《この改革によって、失業者が受け取る手当がこれまでよりも低い水準になるだけでなく、配偶者が持っている車や不動産、一定の保険金額を超える生命保険も資産としてみなされるため、最近では生命保険の解約が増えている》と報告されているが、問題は「経済再生の鍵」とされる今回の改革に直撃される3分の2の国民が、旧東独の州の人々であることだ。それは、《かつて、労働力が西に移動することを懸念した社会主義政府が築いたのが東西分断の壁であったが、人口は依然、東から西へ流出し、西から東へ移ることはめったにない》ために、産業が定着しないという事情に大きく左右されているのだろう。この歪みが東に住んでいるドイツ人の心に陰翳いんえいをもたらすことになるのは避けがたい。

《ベルスさんがかつて再会した西側の親戚とは、交流が絶えたという。「東のことを悪く言われた」のが理由である。

こういう発言は、表向きには西と東の区別をすることが少なくなった今でもよく聞かれる。ドイツ統一から14年がたった今も、心の壁は厚い。実際、亀裂は埋まるどころか深まったように見える。西の州に住むドイツ人の多くは、かつての同情から、あからさまに東独人を「お荷物」と感じるようになった。西の出身者は「東の人を一人も知らないし、知り合いになりたいとも思わない」「東に行ったことは一度もない」という人が驚くほど多い。ドイツが東西に分断されていた頃、よく東独の親戚に贈り物を送っていた人でさえ、今では「不平不満ばかり言う東独人」と反感を持ち、連絡を取らなくな

ったという。

しかし、政府主導で一方向的に進められた統一の結果、途方に暮れてしまった旧東独人ばかりに責任があるのだろうか。職業教育に時間がかかり、西側で通用してきた資格だけが重んじられる統一ドイツで、努力や頑張りで見つかるわけではないことを、身をもって実感している旧東独人たちの多くは、ドイツ統一の変革の波に首都よく乗ることができず、社会保障改革のあおりを真っ向から受けることとなった。》

レポートは先の第2の「月曜デモ」にも触れ、デモは連続して行われており、《8月末には、マグデブルク、ベルリン、ライプチヒなどの都市で9万人が集まった。ノ一方、富裕者が多く、失業率が6%と低いミュンヘンではこの問題への関心は低く、デモなどの抗議行動もほとんどなかった。このことは、この5年間で、ドイツの高額所得者への課税率が9%も下がり、新たな高額所得者が増えていることを象徴しているようである。貧富の差は広がるばかりで、ヨーロッパで最も個人の高額所得者が多いドイツでは、これからも一層、富が特定の社会階層に集中するケースが増えると予想される。高福祉型国家ドイツも徐々に英米型社会に近づき始めているのかもしれない。》

大阪外大教授の市川明は04.10.14付産経で、《自ら「オシー（東ドイツ人）の国から来た最初のヴェシー（西ドイツ人）」と呼ぶ若い世代の文学で、2002年の出版以来ベストセラーを続けている》、東西ドイツの分裂が生んだヤナ・ヘンゼルの小説『東の子どもたち』を取り上げている。《89年のライプツィヒの月曜デモに始まり、学校時代のことや西ドイツに去った恋人のこと、東西ドイツの両親の違いなどが描きだされる。それは「かつては早く消えてしまえと必死に願った」国を「もう一度探る」試みである。作者は書く。「(統一)当時の私たちは西の世界を観察し、理解しようと必死になっていた。みんなを騙せるくらい完璧に西の人たちを真似たかった。」だが同時に彼女は「故郷を捨てることはできない。ベルリンに住むとしたら、東に住み続けるだろう」という。そこにあるのは「東」への郷愁でもないし、「西」への同化でもない》という。

04年の春から9月まで旧東独のライプチヒ大学で教鞭をとっていた東大教授の姜尚中^{カン・サンジュン}は04.10.10付朝日で、《「改革」のかけ声にもかかわらず、都市の一部やその周辺部では虫食い状態的に地域経済の破綻が進み、コミュニティーの空洞化に歯止めがかかる気配はみられない。実際、車窓から時おり見える残骸のような光景には、暗澹とせざるをえない》という旧東ドイツの「すさんだ景観」について、《90年の東西統一から14年、旧東ドイツが直面している混迷ぶりは、「改革」(市場の自由化)と「成熟」(民主主義)は一体ではなく、むしろ場合によっては、相互に剥離してしまうことを我々に教えている》と述べて、「改革」には《地域コミュニティーの豊かな存続》に支えられた「成熟」が伴わなければならないことを指摘する。要するに「ベルリンの壁」崩壊から15年目に至って、統一ドイツの成果が問われる正念場を迎えており、壁崩壊が明らかに世界にむかって人類が前向きに進む一歩にほかならなかったことが証明されるかどうかなのだ。

2004年10月24日記